

縄文中期末葉から後期初頭の土器の変遷と三十稲場式土器 ～宮城県柴田町台遺跡から～

土岐山 武（元仙台市歴史民俗資料館長）

I はじめに

2019年10月の令和元年東日本台風（台風19号）は柴田町にも甚大な被害を与えた。宮城県柴田町台遺跡周辺でも斜面の一部が崩壊する被害が発生し、崩土中から多数の土器片が露出した。

台遺跡のある柴田町は宮城県南部の福島県近くに位置しており、どちらかという福島県や関東などの影響が比較的に濃く見られる地域である。

後日、崩落斜面の踏査が行われ、2000点以上に及ぶ多くの土器等が採集された。その編年的な位置づけやその変遷については本論を通して述べていきたい。更に、本論では三十稲場式土器についても取り上げることにした。採集土器片をすべて整理したところ、わずか23点だけだが、三十稲場式土器に見られる特異な刺突が施された土器片が見られたのである。三十稲場式土器とは、田中耕作氏によると「新潟県を中心として東北南部から関東・中部高地、そして北陸という広い範囲での出土が知られている土器」（『信濃』第3次第37巻第4号1985）とされている。

それが柴田町では向畑遺跡からも検出されている（『柴田町の文化財第5集～遺跡と遺物～』1974、芳賀寿幸1974）。つまり、柴田町だけでも2遺跡から検出されているのである。それならば、県内の他市町村の遺跡からも検出例があるのではないだろうかと思い、改めて既存の報告書や市町村史等を調べてみた。すると、宮城県でも土器の出土数は僅かだが特異な刺突をもつ土器が出土している遺跡があることが分かったのである。

そこで、台遺跡や向畑遺跡でも出土しているこれらの土器が宮城県においてはどのような様相を呈しているのか、その実態はどうなのかを明らかにできないだろうかと思い、もう一つのテーマとした次第である。今回の報告では土器だけとした。報告の中心は

「台遺跡採集土器の時期的な変遷について他遺跡出土類似土器を参考に明らかにする」併せて、

「宮城県内での三十稲場式土器の特徴を有する土器が出土している遺跡についてまとめる」こととした。研究に取り組んでおられる研究者皆様にとってささやかな参考資料の一つとなれば幸いである。

II 台遺跡の概要

1 歴史・調査研究のあゆみ

『郷土研究会会報』第5号「台遺跡」芳賀寿幸 柴田町郷土研究会（1972）

『柴田町の文化財第5集～遺跡と遺物～』（1974、3）

『柴田町史』通史編I「第4編 柴田町の歴史」（1989）『柴田町史』資料編I考古資料（1989）
（台遺跡の概要、考察等については会報第5号、文化財第5集、柴田町史等を参照いただきたい。）

2 縄文中期末葉から後期初頭にかけての土器の変遷と三十稲場式土器

2 遺跡の現状 (2021 年) 令和 3 年 9 月 24 日現在



台遺跡近景 (道路右側が台遺跡)

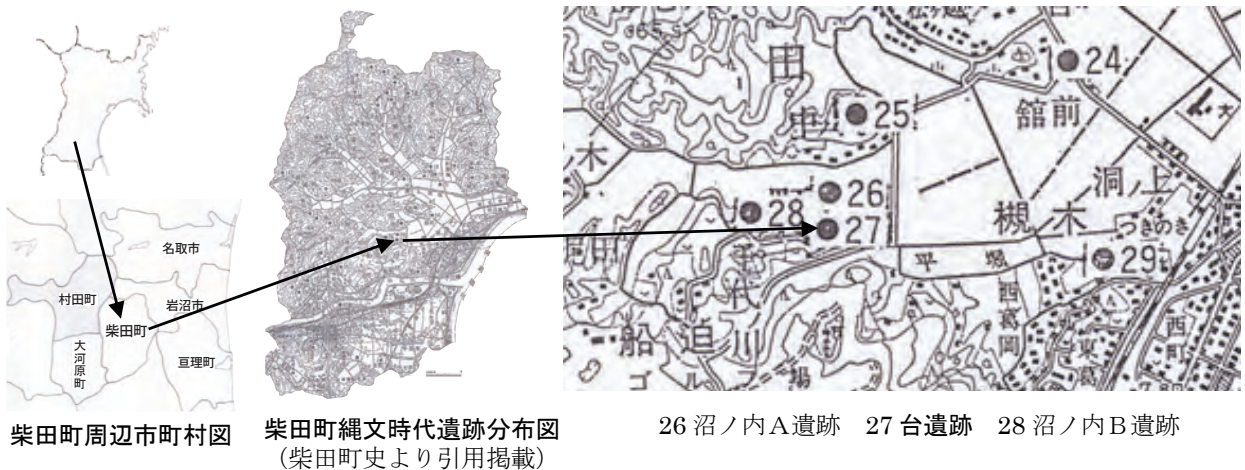


台風 19 号で崩れた崖面の現状



丘陵上は宅地と畑地となっている

3 遺跡の立地・位置



柴田町周辺市町村図

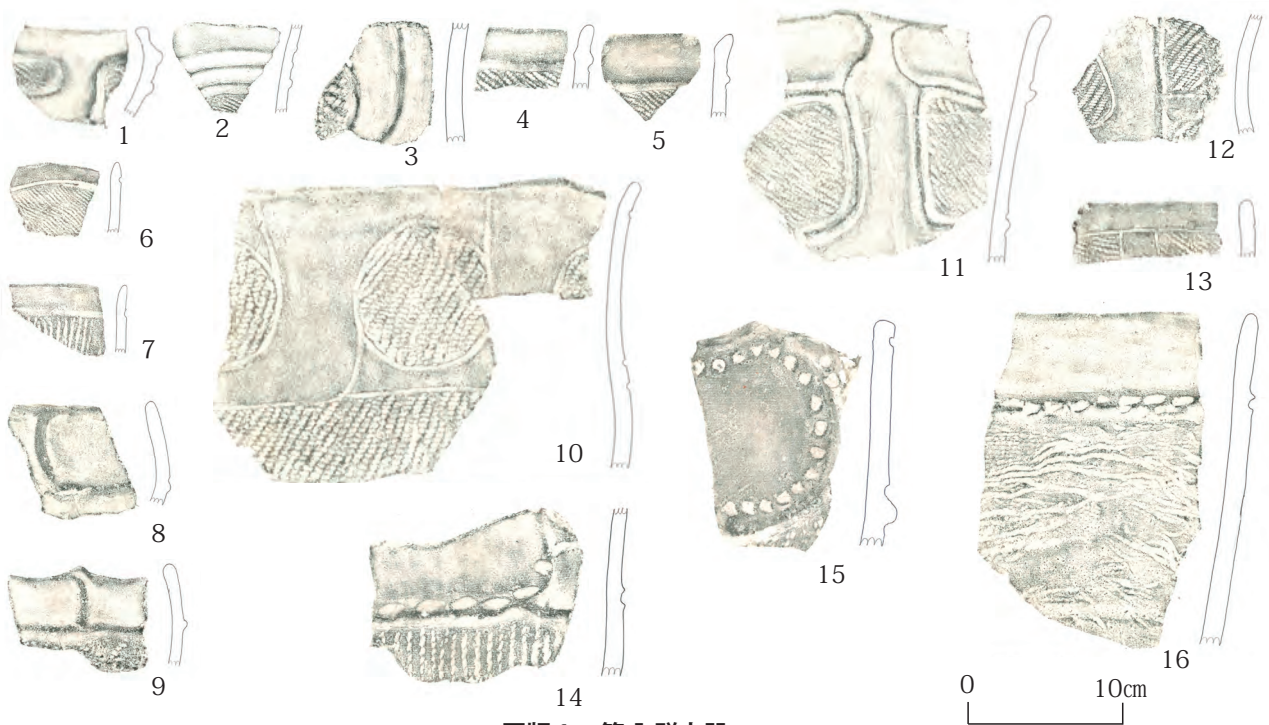
柴田町縄文時代遺跡分布図
(柴田町史より引用掲載)

26 沼ノ内 A 遺跡 27 台遺跡 28 沼ノ内 B 遺跡

Ⅲ 台遺跡採集土器

1 第 I 群土器 (図版 1)

1～3 は曲線的な磨消縄文帯をもつものである。口縁部から胴部にかけて比較的太い隆線により区画された曲線的な磨消縄文帯が施されている。4・5 は 1～3 に見られた曲線的な磨消縄文帯が見られず、頸部に横位隆帯または隆沈線によって口縁部と胴部が区画されているものである。口縁部は無文帯となっており幅は比較的狭い。6・7 は横位隆帯ではなく、沈線のみで口縁部と胴部が区画されているものである。8・9 は口縁部に弧状の隆線文があるものである。9 は波状縁で波状部から弧状の隆線文が垂下している。10～13 は隆沈線 (10～12) または沈線 (13) により方形に近い区画文が施されているものである。10 は無文帯が縦位または曲線の沈線によって区画されており、一部は頸部の横位沈線と接続している。無文帯間には円形に近い縄文帯が施されている。14～16 は横長の連続刺突文が横位、または楕円形状に施されているものである。弧状の隆沈線に沿って施されているもの (14)、楕円状の隆沈線に沿って、内側に D 字状の刺突文が連続して施されているもの (15) などがある。16 は陵状の粗雑な隆線上に横長の刺突が横位に連続して施されている。

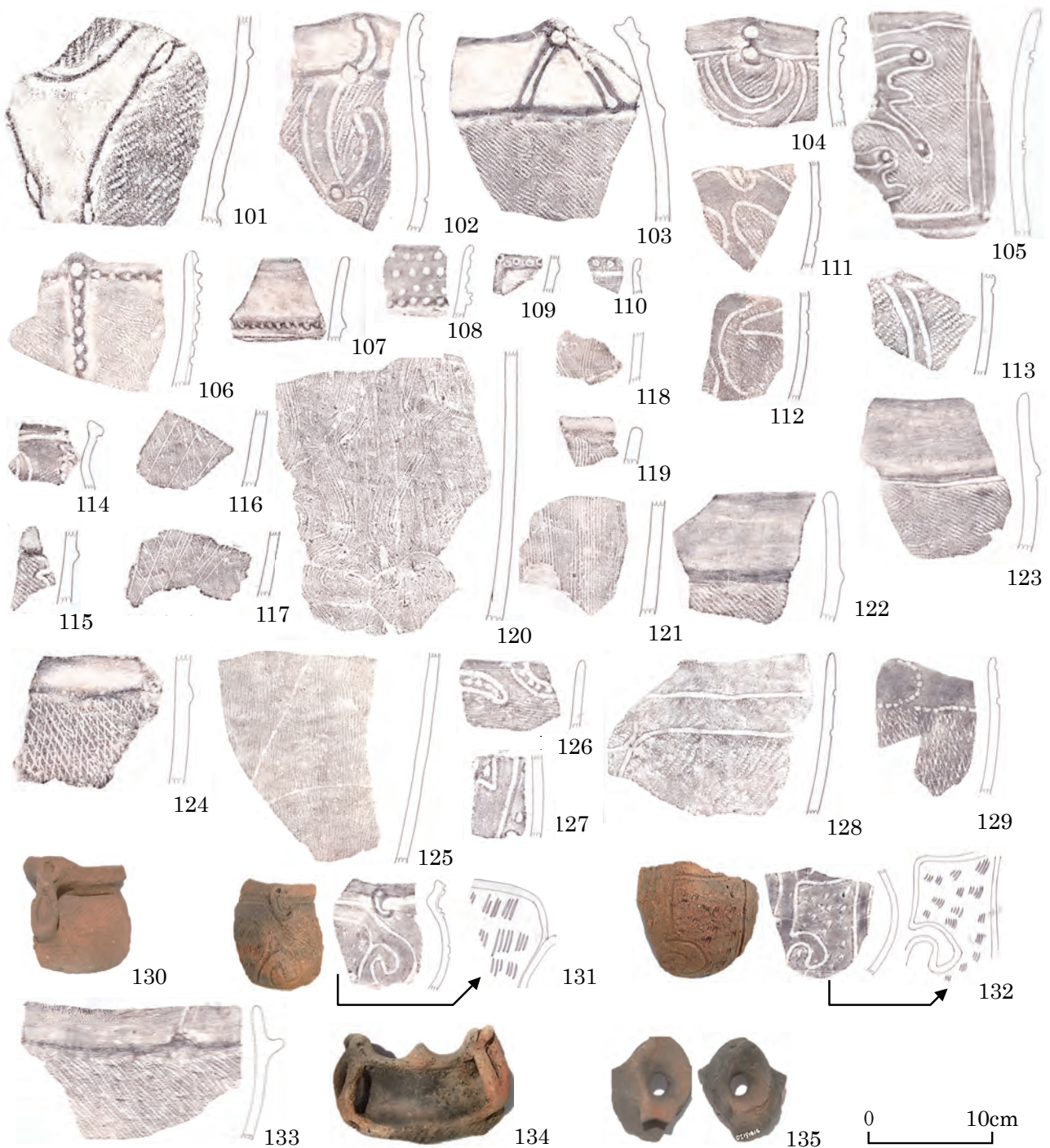


図版1 第I群土器

2 第II群土器 (図版2)

101 は底部から胴部にかけて外傾し、胴部上半で朝顔状に開く大型の深鉢と思われる。胴部に陵状の隆沈線が「Y」字状に施されており、その上に縦長の刺突文が施文されている。

102～105 は小輪 (円形のボタン状粘土塊を添付し、その中央に円い刺突を施してリング状の粘土塊を構成したもの) をもつものである。103 は大型の深鉢で幅広い口縁部無文帯に波状部を頂点とする三角形の隆沈線が施され、それぞれの角に小輪が見られるものである。沈線で描かれた幾何学的なモチーフの端部に小輪が施されているもの (105) などがある。106～108 は隆帯上に刺突が施されているものである。口縁部から縦位の隆帯が垂下し横位に巡る隆帯と丁状に交わり、隆帯上に刺突が施されているもの (106)、刺突が刻目状に施されているもの (107) などがある。108 は刺突が頸部を巡る隆帯上だけでなく、無文帯となっている口縁部にも同様な円形の刺突が見られる。109・110 は円形の竹管等の断面を器面に垂直に押しつけた様な刺突が見られる。111～113 は沈線による曲線的なモチーフが施されているものである。114・115 は沈線による縦位のジグザク文が見られる。116・117 は条線が施されているものである。118～121 は櫛歯状の文様が施されているものである。4本単位のもの (118)、5本単位のもの (119) などが見られる。120 は縦位の流水状のモチーフが他の曲線と絡み合いながら施文されている。121 はやや深めの櫛歯文が縦位に施文されている。122・123 は口縁部に幅の広い無文帯が見られるものである。頸部には隆帯が横位に巡っている。124 は格子状に、125 は直線状に撚糸文が施されている。126・127 は曲線状の沈線で区画された内部に刺突状のモチーフが施されているものである。128 は斜行縄文上に横位の平行沈線が施されており、左端で段違いになっている。129 は口縁部に刺突が横位に施されているものである。



図版2 第Ⅱ群土器

「入」状のモチーフのものと思われる。130は口縁部に8字状にねじれた突起をもつものである。131,132は胴部が球形状に膨らむ器形のもので、沈線による流動的な曲線文内部に、まるで短沈線のように見えるモチーフが描かれているものである。モチーフは数段に渡り施文されている。133は頸部に瘤状の突起を有するものである。134は口縁部が大きく外反し、棒状の橋状把手が施されている。135は孔を伴う突起がみられるものである。

3 第Ⅲ群土器 (図版 3)

301～307は刺突により抉^{えぐ}られた粘土が盛り上がる特徴をもつものである。301は破片全体に刺突が見られる。抉られた底部は滑らかで中央部が球形状に凹んでおり、左端に逆三日月状の盛り上がりが見られる。一つだけだが刺突底面中央に縦にまるで爪を立てたような痕跡が見られる。指を入れ、もう一つの指で摘むようにして盛り上がり部を作り出した可能性も考えられる。302も左側に粘土を抉り盛り上げたような痕跡がある。盛り上がり部の形状は半月状となっている。303は方形状に抉られており左端に棒状に近い盛り上がり部が見られる。304～306は小粘土粒を貼り付けたような盛り上がりが左端に見られる。貼り付けたものかどうかは確認できなかった。307は上から下方向に斜めに刺突がなされており左端の盛り上がりはそれほど高くない。308～311は刺突により粘土が抉られているが、左端の盛り上がりが見られないか、または殆どないものである。308～310は抉られた部分の形状が方形に近い。309は爪で粘土を抉ったような痕跡が底部に見られる。爪を使ったかどうかは確認できなかった。312は先が三角形状になった施文具のようなもので上方から下方に向かって付き刺したような刺突が見られる。その際出来たと思われる盛り上がりが左右に広がっている。313～323は棒状工具等による刺突が見られるもので粘土の盛り上がりが見られないものである。刺突は破片全面に施されているものが多い。317は胴部が球形状に内反し頸部で締め口縁部



図版3 第Ⅲ群土器

が外反する器形のものである。口唇部や頸部の隆帯上にも刺突が見られる。胴部には数段に渡り縦長の刺突が密に施文されている。口縁部には2つの盲孔で「8」字形のモチーフが施された橋状突起が見られる。318は爪形状になっている。319～323は長さの短い刺突となっている。

IV 台遺跡採集第Ⅰ・Ⅱ群土器の分析と考察

1 第Ⅰ群土器の分析とその編年（図版1）

中期末から後期初期、または初頭と思われるものを第Ⅰ群土器とした。本遺跡採集土器は小破片のため文様がどのように展開するのか不明なものが多い。文様の展開によっては編年的に違ってくものもあると思われる。また、中期末、後期初頭の捉え方は研究者によって違っていたり、既存の報告書でも同一の特徴をもつ土器を中期末、あるいは後期初頭と異なった位置付けをしているものも見られる。従って第Ⅰ群土器については上記のような分類とさせていただいた。1～3は口縁部から胴部への文様構成の主体が磨消縄文帯となっており、その展開が曲線を保っているという特徴が見られる。南境貝塚（1969）、山田上ノ台（1987）、大梁川（1988）、菅生田（1982）遺跡からも類似のものが出土しており各報告書では大木10式に位置付けられている。中期末大木10式の古段階のものと考えられる。4・5は口縁部と胴部が区画されたものである。中村良幸氏は「口頸部に惹かれた直線的な沈線によって縄文帯の頭部が切り取られたような形」と表現している。（『観音堂遺跡』1986）

類似の土器は下ノ内遺跡（1990）第Ⅺ層や菅生田遺跡からも中期末葉の土器と伴に出土している。中期末大木10式の新段階のものと考えられるが、文様の展開によっては後期初頭の可能性もある。8・9は口縁部に弧状の隆線文が見られるものである。類似の土器は菅生田遺跡からも出土している。菅生田遺跡の報告書では第Ⅱ群土器とされ後期前葉に位置付けられている。10～13は方形に近い区画文をもつものであるが、文様が全体ではどのように展開していくのかは不明である。10は無文帯間に円形に近い縄文帯が施されている。このようなモチーフのものは菅生田遺跡からも出土しており、菅生田遺跡では大木10式第Ⅱ段階の中でも比較的新しい時期のものとされている。11はLR rの縄文が施文されている。このような撚りは後期に出現するとのことである。14～16は連続した刺突文が施されているものである。14のような隆帯に沿って横長の刺突文が施文されている土器は県内でも南境貝塚、大梁川、二屋敷（1984）、山田上ノ台遺跡などからも出土している。大梁川遺跡では第Ⅰ層期に分類され、大木10式後半期とされている。二屋敷遺跡では中期の土器として、山田上ノ台遺跡では第Ⅹ群第9類として大木10式第Ⅲ段階に位置付けられている。しかし、後期に位置付けられ編年的には門前式より一つ前のものではないかとの指摘もある。菅生田遺跡では第Ⅱ群土器として後期前葉に位置付けられている。16については隆帯上に刺突文が施されており後期に近いものと思われる。このように編年的位置付けの見解が中期、後期と分かれているものもある。これらを含めて第Ⅰ群土器とさせていただいた。

2 第Ⅱ群土器の分析とその編年（図版2）

後期初頭と思われるものを第Ⅱ群土器とした。101のような「Y」字状、陵線上に縦長の刺突文が施されたものは六反田（1987）、二屋敷、下ノ内遺跡からも出土しており、門前式に位置付けられ後

期初頭とされている。『小名浜』(渡辺一雄・馬目順一編 1968)によると、出土土器について「全出土土器の9割以上が縄文後期土器だ」とし出土土器を文様上の要素から「第1類「隆起線文」、第2類「磨消縄文」、第3類「沈線文」、第4類「櫛歯条線文」等に分類している。台遺跡第Ⅱ群土器としたものはこれらの文様要素と類似しているものが多く見られる。台遺跡の102～105は『小名浜』での第1類土器の文様表記を引用すれば「頸部を水平に一周する隆起線」「口縁部文様帯と頸部文様帯に区分される」「口縁部文様帯は口縁の頂点と頸部隆起線とを結んでC字状の隆起線が付され、隆起線内側には沈線が施されるため、あたかも2本の隆起線の感を抱かしめる」「それら隆起線の頂点、起点、終点などの要所には小輪(円形のボタン状粘土塊を添付し、その中央に円い刺突を施してリング状の粘土塊を構成したもの)を配している」「隆起線以外のものは無文帯のまま残される」など、ほぼ『小名浜』の第1類土器と共通する文様要素を有するものである。103は菅生田、二屋敷、山田上ノ台遺跡など多くの遺跡で全く同じモチーフの土器が出土しており、菅生田遺跡では第Ⅱ群土器として、山田上ノ台遺跡では第Ⅺ群第5類として、いずれの報告書でも後期初頭に位置付けられている。104・105のように「文様内に凹部(盲孔)が特徴的に施文されたもの」について後藤勝彦氏は『仙台湾湾岸の基礎的研究Ⅱ—南境貝塚—』(2013)の中で「宮戸Ⅰb式に極めて近い土器群である」とされている。台遺跡106～108は隆帯上に刺突が施されているものであるが、同様の文様要素は南境貝塚、福島県綱取C地点貝塚(金子浩昌・和田哲 1968)、いわき市大畑遺跡(小林行雄監修・馬目順一編 1975)からも出土しており後期初頭・前半に位置付けられている。109・110は類似の土器を確認できなかった。111～113は沈線による曲線的なモチーフが施されているものであるが、同様の文様要素は『小名浜』での第2類土器として、また綱取貝塚第四地点からも出土しており堀之内Ⅰ式として紹介(馬目)されている。116・117は条線が施されているものである。菅生田遺跡でも類似の土器が出土しており後期初頭に位置付けられている。118～121は櫛歯状の文様が施されているものである。類似の土器は二屋敷遺跡からも出土しており第Ⅱ群土器として後期前葉の土器に位置付けている。また、田中耕作氏によると、条線文は称名寺Ⅰ・Ⅱ式で盛んに用いられている(田中耕作『信濃』第3次第37巻第4号)とのことである。122・123は口縁部に幅の広い無文帯が見られるものである。郡山市柳橋遺跡からも類似の土器が出土しておりB-1-1類に分類され、綱取Ⅰ式に位置付けられている。124は後期初頭の土器にしばしばみられるような網代状燃糸文が、125は直線状の燃糸文が見られる。126・127は福島県いわき市^{あいや}愛谷遺跡からも類似の土器が出土しており、綱取Ⅰ式に位置付けられている。128は二屋敷遺跡でも類似の土器が出土している。後期初頭よりも新しい時期のものかもしれない。129は刺突により「入」の字状のモチーフが描かれているものであり、後期初頭の土器と伴に出土している遺跡が見られる。131・132はまるで短沈線のように見えるモチーフをもつ土器である。類似の土器は綱取C地点貝塚から第Ⅲ群第3類土器b種(図1)として出土している。(『小名浜』所収)。同報告

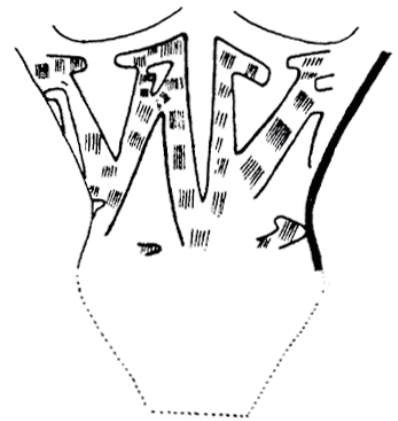


図1 綱取C地点貝塚出土土器

書で金子浩昌・和田哲氏は「無文地に沈線文を施し、沈線間に刺突を加えるなどした土器の文様モチーフは称名寺Ⅰ式のそれと類似している」と述べている。称名寺貝塚からも類似の土器が出土しているが、同貝塚の整理に携わった担当者によると「このモチーフは櫛歯のようなものを使用したもので、一本ずつ引かれたものではない」とのことであった。台遺跡の131・132を見ていただいたが「称名寺出土と同じモチーフで称名寺Ⅱ式に見られるモチーフの一つだ」とのことであった。133のように胴部中位に瘤状の突起が見られるものは、二屋敷遺跡からも類似の土器が出土しており後期初頭に位置付けられている。134・135は突起、把手、貫通孔等をもつものだが後期初頭のものと思われる。

V 台遺跡採集第Ⅲ群土器の分析と考察（図版3）

1 特異な刺突について

台遺跡からは三十稲場式に見られる特異な刺突文が施されている土器が採集されている。刺突文は多くの時期の土器に見られるが、なぜ、刺突を一見ただけで三十稲場式だと識別できるのだろうか。

石坂圭介氏は「三十稲場式土器」の解説文の中で、「特殊な刺突文」として花卉状刺突文を取り上げ「この花卉状刺突文は非常に特徴的であり、遠地で発見されても同定が比較的容易である」と述べている。この花卉状刺突文について、田中耕作氏は「所謂「三十稲場式土器」の成立について」（『信濃』第3次第37巻第4号）の文中で刺突文を6つに分類しており、その一つとして花卉状刺突文を取り上げている。その分類は以下の通りである。

分類記号	刺突文名	主 な 特 徴
a	花卉状・魚鱗形	竹管の背面を主に横方向から刺突する。挟(えぐ)れた粘土が盛り上がる特徴となる
b	突瘤文	小粘土粒を全面に貼りつけたもの。半截竹管で器面土を盛り上げて表現したもの
c	引き搔いたような文様	半截又は多截の竹管で引き搔いたような文様
d	所謂爪形文	
e	垂直刺突文	円形竹管や、棒状・へら状工具を器面に対し垂直に刺突するもの
f	押し引文	施文具の背を土器に押し引き、三角状を呈するもの

この花卉状刺突文（鱗状刺突文）について高木晃氏は「土器の移動と交流Ⅱ―東北地方出土の三十稲場式系土器について―」（第13回岩手考古学会研究大会1994年発表）の文中で「器面をえぐるように突きさし、盛り上がった粘土を指で押さえる手法は三十稲場式に特徴的なものとされている。大木式でも刺突文は一般的だが、花卉状刺突文の手法は中期後葉には用いられない。従来、東北北半ではこの花卉状刺突文を持つ土器を三十稲場式として捉えてきた。」と述べている。

さて、具体的にどのような刺突文がどの名称に該当するのかは、必ずしも明確ではないが、菊池寛子氏は「三十稲場式類似土器の施文方法について」（『岩手考古学』第16号 2004）で「北上川中流域の土器では」としながら6遺跡から出土した土器について「刺突の表現と施文具」として表にまとめ、具体的にどのような文様であるかを示している。それを、まとめると以下の様になる。

	分 類	主な特徴
刺突	1類 ：棒状工具等による刺突で粘土の隆起がみられないもの	半截竹管による右から左方向の刺突、単純な爪形文などもある。
	2類 a ：工具による持ち上がりにより粘土が自然に隆起したもの	2類 a と b は技法は変わらないが、粘土粒の付き方が若干違っているため1つにまとめることができないものである。
	2類 b ：2類 a と同様だが粘土粒がより大きく明瞭なもの	2類 b の粘土粒は土器周辺が土器本体と明確に区別されるものが多く、それは工具の持ち上げだけでは作り出しにくいものである。
刺突 + 指による二次的動作	3類 ：刺突の後に指によると思われる二次的動作が加わるもの	工具による刺突と考えられるが、その後に爪形文が観察されるものもある。粘土粒にはしわが出来ているものもあり、複数回の粘土の寄せ集めが行われたものと思われる。指によるつまみの可能性があるものもある。
指によるつまみ	4類 ：指によるつまみと思われるもの	土器への工具のあたりが滑らかであることから指による施文と考えられる。

北上川中流域出土土器の施文具と技法による分類（菊池寛子『岩手考古学』第16号より 一部分のみ引用掲載）

また、特徴的な刺突文の名称例として、以下の3点について明記している。

瘤状突起 	ハの字状刺突 	キャタピラ状刺突 
--	--	--

2 台遺跡での特異な刺突をもつ土器について

以上の分類を参考にして台遺跡で採集された刺突文を分類してみると、以下のようになる。

分 類	土 器 番 号
花卉状・魚鱗形か？	301 302
刺突の後に指または何らかの二次的動作を加えて盛り上がりが見られるもの	303 304 305 306 307 挟られて盛り上がったものなのか、小粘土粒による貼り瘤なのか、左右から指でつまみあげたものなのかは識別が難しい。
盛り上がりが明確でないもの（わずかに盛り上がりが見られるものも見られる）	308 309 310 311
左右に盛り上がりが見られるもの	312
爪形文 棒状工具等による刺突で粘土の隆起がみられないもの	313～323 施文具の幅、長さ、深さ、施文の方向などが同一土器でも必ずしも同じでないものも見られる。

以上、田中耕作氏、菊池寛子氏の分類を参考にしながら、台遺跡検出の刺突文について分類してみた。刺突の違いについては田中耕作氏が「これらの施文の違いによって地域差を論じることは困難なようだ。しかし、時間差という点では、花卉状・魚鱗形が古い様相と考えられる。」（『信濃』第3次第37巻第4号）と述べている。従って今回の分類によって何かが解明できるということにはならないが、このような資料の蓄積が新たな解明につながっていければと思っている。三十稲場式土器は新潟県を中心として東北南部、関東、中部、北陸と広い範囲で出土している。しかし、田中耕作氏は『信濃』

第3次第37巻第4号で「土器構成要素が土着し集団に受け入れられている地域と搬入もしくは模倣による土器が僅かに出土するだけの地域は、自ら性格が異なるものであり区別して扱わなければならない」と述べている。このご指摘からすれば本遺跡は田中氏の述べている三十稲場式の「外圈」ということになるであろう。

次に三十稲場式はいつ出現し、いつ終わりを迎えたのかを論じてみたい。

田中氏は三十稲場式を古段階、新段階、南三十稲場式（1989）とした変遷案を示しているが（『縄文時代』10 1999）三十稲場式古段階は称名寺Ⅰ式新段階及びⅡ式に併行させている。また、本間宏氏は会津や中通り地方での例示を基に、その下限を綱取Ⅰ式末期から綱取Ⅱ式古段階としている。終末については『新潟県の考古学』Ⅲ（2019）の編年表によると、三十稲場式（新）が堀之内Ⅰ式（古）（中）と併行関係とされている。田中氏は（『信濃』第3次第37巻第4号）で三十稲場式の終末について「堀之内Ⅱ式まで残るであろう」と述べている。また、「関東では三十稲場式と共伴する形で称名寺Ⅱ式が出土する例が多い」ことも紹介している。台遺跡では採集土器のため、どの編年の土器と共伴するのは論じることができないが、何れかの日に層位的に明らかになる日が来ることを念じたい。最後になるが、現在調べた限りにおける県内の三十稲場式土器の特質を有する土器が出土した遺跡を紹介したい。県内の収蔵庫にまだまだ眠っているであろう資料が公表され、更に詳細な実態が明らかになることを願っている。

3 県内遺跡での特異な刺突をもつ土器について

(1) 特異な刺突をもつ土器出土遺跡名一覧

地図番号	遺跡名	市町村名	図版-土器番号	地図番号	遺跡名	市町村名	図版-土器番号
★1	台	柴田町	図版3	10	西裏B	蔵王町	4-15
2	向畑	柴田町	4-1	11	大梁川	七ヶ宿町	4-16
3	六反田	仙台市	4-2、3	12	中ノ内C	川崎町	4-17
4	山田上ノ台	仙台市	4-4、5	13	東足立	村田町	4-18
5	下ノ内	仙台市	4-6	14	南境貝塚	石巻市	4-19
6	農学寮跡	仙台市	4-7	15	屋敷浜貝塚	石巻市	4-20
7	菅生田	白石市	4-8、9	16	金取	大和町	4-21
8	一本木	蔵王町	4-10、11	17	青木畑	旧一迫町	4-22、23
9	二屋敷	蔵王町	4-12~14	18	三本松	加美町	4-24

VI おわりに

台遺跡採集土器については「分析と考察」で述べた通りである。ここでは、三十稲場式土器の要素をもつ土器について述べさせていただく。二年前、柴田町「しばたの郷土館」展示室で見たほぼ完形に近い、ある土器との出会いが始まりだった。向畑遺跡から出土したその土器（図版4-1）は器面を覆い尽くすように数段に渡り特異な刺突が施されていた。そんな折、2019年の台風19号の被害により崩落した斜面等より採集された2000点を超える土器を見る機会を得た。全ての土器を調べた所、わずか23点ではあるが、向畑遺跡の出土土器と同様な特異な刺突を有する土器が混在している

(2) 特異な刺突をもつ土器出土遺跡地図



図 2

(3) 宮城県内から出土している三十稻場式の要素を持つとみられる土器



図版 4 宮城県内の三十稻場式土器の要素をもつとみられる土器

ことが分かった。柴田町だけで少なくとも向畑、台の2遺跡で特異な刺突を有する土器が確認できた。そうならば、他の市町村でも出土例があるのではないかと思い、既存の調査報告書、県内の市町村史等を調べてみた。すると、同様のモチーフをもつ遺跡が複数あることが分かった。(図2) しかし、(あえて特異な刺突をもつだけで「三十稲場」と表記しなかつただけなのかも知れないが) 既存の報告書等を熟読しても三十稲場の文字が記述されているものは殆どなかった。以上が三十稲場式土器の要素をもつ土器との出会いと経緯である。そして、このようなことから作成したものが本論である。本論では特異な刺突のみに着目して分析を行ったが、三十稲場式土器の要素はそればかりでないことは勿論のことである。「く」の字状に外反する口縁部無文帯に、四単位の橋状把手や貼付文を配した深鉢形土器(田中耕作)など、刺突以外にも多くの要素がある。田中耕作氏は「外圏で確認される三十稲場式土器はこの橋状取手を含めた口縁部と、胴部の刺突文が決め手の主要な要素と言える」と述べている。次回は刺突以外の要素等にも着目したものをまとめてみたいと思っている。

末文に当たり私事で恐縮だが、今回、台遺跡をまとめるために読んだ柴田町の歴史関係の文献には同じ考古学の仲間であった「芳賀寿幸」の名前が所々に書かれてあった。彼の名前を見る度に、もし、氏が存命ならきっと私など及びもつかないすばらしい台遺跡の論をまとめていたことだろうと思えてならなかった。柴田町に生まれ、柴田町の縄文研究を献身的に推進されていた芳賀氏の志を少しでもこの稿に込めることができたなら幸いと思えた。最後に多くの人の助言と卓越した多くの論文に触れさせていただいたことに感謝申し上げたい。

【引用参考文献一覧】

- 1 『竹ノ内遺跡』(1990) 2 『山田上ノ台遺跡』(1987) 3 『六反田遺跡』(1981) 4 『下ノ内遺跡』(1982) 5 『菅生田遺跡』(1982) 6 『大梁川・小梁川遺跡』(1988) 7 『小梁川遺跡』(1986) 8 『小梁川遺跡』(1987) 9 丹羽茂「大木式土器」『縄文文化の研究』4(1981) 10 本間宏「大木10式土器の考え方」『しのぶ考古』10(1994)
- 11 本間宏「南境式・綱取式」『総覧縄文土器』(2008) 12 森幸彦「大木9、10式土器」『総覧縄文土器』(2008)
- 13 芳賀寿幸「台遺跡」『郷土研究会会報』第5号(1972) 14 『柴田町の文化財第5集～遺跡と遺物～』(1974)
- 15 芳賀寿幸「向畑遺跡調査概報」『郷土研究会会報』第7号(1974) 16 「原始・古代史」『柴田町史通史編Ⅰ』(1989) 17 『柴田町史』考古資料編(1983) 18 後藤勝彦『仙台湾沿岸貝塚の基礎的研究Ⅱ－南境貝塚－』(2013)
- 19 後藤勝彦「南境貝塚調査の層位的成果Ⅲ－5・6トレンチの場合の再提示－」『宮城史学』34号(2015) 20 相原淳一「東北地方における縄文時代中期末葉から後期前葉に関する土器編年」21 相原淳一「阿武隈川下流域における縄文時代後期初頭の土器編年研究序説」22 小林行雄監修・馬目順一編集『大畑貝塚』(1975) 23 『小名浜』(1968) 福島県いわき市教育委員会磐城出張所 24 金子浩昌・和田哲「綱取C地点貝塚の発掘」『小名浜』(1968) 25 「綱取貝塚第四地点発見の堀之内Ⅰ式土器の考察」『小名浜』(1968) 26 馬目順一「いわゆる綱取貝塚C地点の土器について」(1977) 27 馬目順一「各地の堀之内土器とその変遷 南東北」『シンポジウム堀之内式土器資料集』(1982) 28 稲村晃嗣「門前式土器」『総覧縄文土器』29 熊谷常正「門前式土器の検討」(1986)
- 30 及川洵他『門前貝塚』(1974) 31 「南境貝塚」『矢本町史』32 『二屋敷遺跡』(1984) 33 『北野遺跡Ⅱ』(2005) 34 『長割遺跡』(2011) 35 『元屋敷遺跡』(1995) 36 田中耕作「所謂「三十稲場式土器」の成立について」『信濃』第3次第37巻第4号(1985) 37 田中耕作「三十稲場式土器研究の現状と課題」『新潟考古学談話会会報』第5号(1990) 38 田中耕作「三十稲場式土器様式」『縄文土器大観』第4巻(1989) 小学館 39 駒形敏朗他『埋蔵文化財発掘調査報告書 岩野原遺跡』40 高木晃「土器の移動と交流Ⅱ－東北地方出土の三十稲場式系統土器について－」(1994) 岩手考古学会 41 馬高縄文館「解説シリーズNo.1 火焰土器と馬高・三十稲場遺跡」長岡市教育委員会 42 新潟県考古学会設立30周年記念誌『新潟県の考古学Ⅲ』(2019) 新潟県考古学会 43 菊池寛子「三十稲場式類似土器の施文方法について」『岩手考古学』第16号(2004) 岩手考古学会 44 『農学寮跡遺跡』(1981) 45 『青木畑遺跡』(1982) 46 『東足立遺跡』47 『三本松遺跡』(2011) 48 『中ノ内A遺跡・本屋敷遺跡他』(1987) 49 「一本松」『白石市史』別巻考古資料篇 50 『金取遺跡』(2004) 51 柳橋遺跡』(2002)